

夢と希望

——所員就任にあたって——

司馬 純詩

「キューポラのある街」という映画があった。浜田光男と吉永小百合の、「輝かしき日活」映画である。川口か川崎かの工業地帯で、工員として生きる若い人たちの喜怒哀楽を描いた映画だった。

一九六〇年代。人々は、高度成長期にあつて希望に燃えていた。歌さえも「美しい十代」といった、明るいさわやかな歌が流行っていたのである。

その同じ世代の人たちはいま、五〇代。打ち続く不況の中で、かつてない苦境に立たされている。この数年で、自殺者が急増した。

そして、私たちの明治学院大学では、若い人の自死が類ないほどに多い。

夢や希望が与えられない、そんな大学って一体何なのだろう。近年の事態を考えるにあたって、そのような思いがつのる。

一九四五年八月。侵略戦争に敗北した日本は、六百万人からの満州移民を引き揚げさせることになる。

庶民の敗走行は悲惨なものである。以下は朝日新聞に掲載された実話である。

実質的に日本の支配下にあつたソ満国境「陳巴爾虎旗」の旗公署警察官の一団七〇人は八月九日未明、ソ連軍や中国人の襲撃を受けて二千メートル級の山々が連なる大興安嶺へ逃げ込む。夜、焚き火を囲んで幹部七・八人が協議した結果、「足手まといの子供全員に死んでもらって、大人は敵と最後まで戦おう」と決心する。

死への旅立ちを前にと、子供たちの手に砂

糖がスプーン一杯ずつ配られ、中隊長から自分の三才の一人娘のこめかみにピストルを当て、発射した。中隊副隊長もそれに続いて、子を「始末」した。

「僕だって歩けるよ。殺さないでよ」という男の子のわめき声も聞こえたと言う。

記事によると、岩手県の藤本さんはそれでもためらっていたという。

そこへ副隊長が「まだですか」とやってきた。

傍らの妻を見つめると、「父さん、やむをえないね」とうなずいたという。

一才半の長女は、母に抱かれたまま、額に銃口が当てられた。

妻は瞬間、目をそむけたという。

アブラハムの子イサクは、父にいけにえにされようとするその瞬間に主に止められ、救われる。この時は、赤ん坊から七才までの子供二十四人全員が、殺されたという。

遺体は二列に並べられ、母親たちは髪やつめを切り、すがりついて泣いた。

幼女の母はいつかこの地に来る事があるのではないかと、木に娘「洋子臨終の地」とナイフで彫りつづけたという。

「殺さないでよ」と叫んだ男の子は、一体どんな思いで、銃を向ける父を見たのだろうか。

大人たちは長い逃避行を続け、翌年の十一月に日本に引き揚げる。

(一九八七年二月一七日朝日新聞コラム「語り尽くされたか」第二部の5より)

私は、戦後生まれであるが、旧満州のハルビンに生を享けた。

物心ついたころ、無くなった祖母を弔うために、国交のない中国から母は私以下四人のおさな子を引き連れて、引き揚げ船「興安丸」で帰ってきたのである。父はその後、間をおかず秘密裏に渡ってきた。その後、私の末妹が成人するまで、私たち一家は日本で「戦い」のような貧しい、不安定な生活をしのぐこと

になる。

「足手まとい」と、自らの子を殺した人たちと、無鉄砲にも乳飲み子を含めた四人の子供を引き連れてきた私の親とは、どこに一線が画されていたのであろうか。「民族と国家」を盲信するかどうか、それはかかっているように思う。

ともかく私たち兄弟は生き延びている。当時の無知な庶民の差別の中で、家族は悲惨な生活にあっても、明るい未来を夢見て生き延びてきたのである。

「失われた十年」に続くこの不況の中で、二万人で安定していた自殺者数はいまや三万二千人だという。うち中・高年の犠牲は一万四千人あまりの増加と言うから、増えた分はほとんどこの世代である。「キューボラのある街」を見て育った人たちは、かつてないつらい中・高年期を迎えている。

しかし、若い人たちの自殺は実は、増えているわけではない。

翻ってみるに、明治学院大学生の自死数は残念ながら、異常な高数値である。

私にはどうしてもこれが見過ごせない。

若い人たちの死には、胸が痛む。

すでに学内の各部署は連携を保って対策に奔走している。

考えてみるに、夢と希望が与えられないとしたら、私たちの大学は一体何なのだろうか。思いは晴れない。

若い人たちに、明るい未来を見せて上げられないとしたら、私たちの大学は、一体何なのだろうか。

(しば じゅんじ 国際学部教授)

